

実践報告

留学生の日本語による詩の創作活動がもたらした諸効果  
—日本語教育とキャンパス内多文化共生の観点から—

田中 真由美

日本福祉大学 国際福祉開発学部

The Effectiveness of Creative Poetry Writing in Japanese Classes for  
International Students  
— From the Perspectives of Japanese Language Education and  
Multicultural Campus Development —

Mayumi TANAKA

Faculty of International Welfare Development, Nihon Fukushi University

**Keywords** : 留学生, 詩作活動, 日本語教育, キャンパス内多文化共生, 多文化間共修

要旨

留学生を対象とした日本語の遠隔授業内で、谷川俊太郎の詩「生きる」を読み、自分の「生きるということ」について詩を創作するという課題を出した。留学生は日本語の詩を読むのも書くのも初めてであったが、母文化で既に持っている知識と能力を活かし秀逸な作品を創作した。そこでより多くの人に読んでもらうために、キャンパス内での展示、動画の作成とYouTubeへのアップロード、インスタグラムへの投稿という3つの手段で発信を行った。この一連の活動についての効果を測るために調査を行ったところ、詩の作者である留学生は、日本語で詩を作ることを楽しみ、また発信したことに關しては恥ずかしさも有りつつ嬉しいと感じていたことが分かった。また展示などで詩を読んだ日本人学生については留学生に対する意識に変化が芽生え、コロナ禍で交流の機会が減っていた日本人学生と留学生の距離が縮まり、キャンパス内の多文化共生の促進に寄与していたことが分かった。

1. はじめに

1983年の「留学生10万人計画」、2008年の「留学生30万人計画」など、留学生獲得に重点を置いた国の施策の結果、日本国内の高等教育機関に在籍する外国人留学生の数は1980年には6,572人であったが、2020年には218,783人と、40年でおおよそ30倍に増加している(日本学生支援機構2020)。こうした留学生の受け入れ数増加に伴い大学内の国際化が急速に進む中、キャン

パス内で日本人学生と異文化を持つ留学生が共生する、いわゆる「キャンパス内の多文化共生」が新たなキーワードとなっており、留学生を多く受け入れている大学のWebサイトを見ても、「多文化共生のキャンパスライフ」(国際教養大学)、「多文化共生キャンパスの実現」(龍谷大学)、「多文化共生・グローバルキャンパス」(豊橋技術科学大学)などと言った言葉が並んでいる。また、それに伴い留学生と日本人学生の交流に關す

る研究（青木 2010; 有田 2004; 祖父江 2020; 花見 2020 他）や、留学生と日本人学生がともに学び合う多文化間共修に関する議論（坂本他 2017）もなされるようになってきている。少子高齢化で生産年齢人口の減少が進むこれからの日本において、外国人は日本社会の構成員として日本人とともに日本という国を作っていく存在であり、現在のキャンパス内の多文化社会は将来の日本社会の縮図とも言える。持続可能な社会の実現という観点からも、キャンパス内の多文化共生の実現は個々の大学内だけの問題に留まらずこれからの日本社会の在り方に大きな意味を持つ。

日本福祉大学（以下、本学）でもグローバル化推進の一環として留学生の受け入れを実施しており、「留学生や海外にルーツを持つ学生に対して日本人学生から積極的にコミュニケーションを取り、『外国人から多文化を学んでいく』という姿勢を貫くことで、相互理解を促進させ、一方通行ではない多文化共生社会をキャンパス内で作り上げていく」という目標を掲げている。本稿の執筆時である 2021 年 9 月現在、筆者の所属する国際福祉開発学部（以下、本学部）ではベトナム、ネパールをはじめアジア 9 か国／地域からの留学生 81 名が、日本人学生とともに学部の正規生として席を並べて学んでいる。しかしながら坪井（1999:63）が報告している通り、キャンパス内の留学生数が増えたからといって自然に国際交流が深まり相互理解が促進され日本人学生の国際化が進むというわけではなく、国内外の多くの研究によってもホスト国の学生と留学生は放置したままでは親密な交流にはつながらないということが明らかになっている。山田（2018:87）では「日本の学生も留学生も互いに交流しながら相手のことを知りたいと思っても、なかなかそのきっかけがつかめずにいる。（中略）多文化教育に関連する授業を担当する教員はこのような実態を踏まえた上で、なんらかの「仕掛け」を作り、多文化相互学習のための貴重な機会を有効に活用すべきであろう」と、教員が留学生と日本人学生の交流の「仕掛け」に関与すべきであると述べている。本学部でも祖父江（2020）が報告している通り、授業でのグループワークやワールド・ユース・ミーティングなど、留学生と日本人学生の交流のきっかけづくりに取り組んできた。しかしながら後で述べる本学部での調査でも、「授業中も休暇中もプライベートな付き合いがある」と答えた学生は全体の 22.7% に留まっており、留学生と日本人学生の

付き合いは依然として限定的であると言わざるを得ない。更に 2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大とそれに伴う感染防止対策のために、年度初めから全ての授業が遠隔に切り替わってしまった為、留学生と日本人学生の接触・交流の場面は一段と減ってしまっていた。そのような状況の中、留学生を対象とした日本語の遠隔授業内で詩の創作活動をしたところ、大学の授業内ではなかなか見ることのできない留学生の素顔が見える秀逸な作品が多く提出された。そこでこの詩を読んで留学生の事を知ってもらおうと、詩を印刷してキャンパス内で展示したり動画を作成して発信したりした。本稿では、日本語教育の一環として行った詩の創作活動の実践報告に加え、その詩を発信したことによって書き手である留学生と読み手である日本人学生の心理的側面にどのような効果があったかについて報告する。

## 2. 遠隔授業における詩の鑑賞及び創作活動の実践

2020 年の年初から始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、大学生はもとより、保護者、大学の教職員など大学に関わる全ての人に多大なる影響を及ぼした。文部科学省の 2020 年 5 月の調査では、全体の約 9 割の大学等が授業開始を延期し、そのほぼ全て（96.6%）が遠隔授業の活用を実施または検討する方針であると答えている。本学部でも 2020 年度は授業開始を 1 か月延期し 5 月の連休明けの授業スタートとなり、6 月末までは全ての授業において ZOOM を用いた遠隔授業をすることになった。新学期早々、学生は自宅待機を命じられ、教職員は経験のない遠隔授業の準備に追われた。特に新入生にとっては入学式もできず、大学のキャンパスにほとんど足を踏み入れないまま遠隔授業が始まるという、前途多難な大学生生活のスタートとなった。

前章 1. で述べた通り、本学では留学生を学部正規生として受け入れており、留学生は基本的に日本人学生と一緒に授業を受けるが、そのほかに留学生のみを対象とした日本語の授業を 1・2 年次に全員履修することになっている。この科目は全学教育センター科目でありキャンパスごとにそれぞれ行うため、東海キャンパスでは経済学部と国際福祉開発学部の留学生をまとめて授業を行っている。この科目の 2020 年度の東海キャンパスでの履修者は合計 62 名であった。これを年度初めに行うプレイスメントテストの結果で 2 つに分け、出身国

や学部などを考慮しながら更にそれぞれ2つに分けるため、学年と関係なく1・2年生混合のレベル別のクラスが4クラス存在することになる。授業は前期・後期とも「読む・書く」を中心とした授業と「話す・聞く」を中心とした授業が1コマずつ、計2コマを月曜日の1・2限に連続して行っており、筆者はレベルが下半分の2つのクラスの「読む・書く」の授業を担当している。上で述べた通り2020年度は新学期から全ての授業が遠隔授業となり、この日本語の授業も他の授業と同様に5月の連休明けからZOOMを使ったオンライン形式でスタートした。そんな中で教材として扱ったのが谷川俊太郎の詩「生きる」であった。

## 2. 1. 詩を取り入れた日本語教育

日本語教育に詩を取り入れた研究はあまり多くない。田井(2020)はインドネシアのダルマ・プルサダ大学の日本語学科に所属する学生を対象に日本語の詩を教材とした授業を行い、批判的思考力、相互理解力等の育成において詩教材は非常に効果的であったと述べている。また山崎(2006)はベオグラード大学の日本語学科で行ってきた「詩のワークショップ」について、横山(2021)は四川外国語大学国際教育学院の日本語センターと継続教育学院で行った詩の授業についてそれぞれ報告している。しかながらいずれも詩を鑑賞する授業の報告であり、「詩を書く」活動は行っていない。詩を取り入れた教授法を開拓した新井(2012)は、埼玉大学の留学生を対象に詩の鑑賞と創作の授業を行い、授業後のアンケートの結果、詩の創作について留学生の評価は高く、知的好奇心を高めたと報告している。また新井は日本語教育は他の語学教育と比べ、実用性に偏る傾向が著しいとし、「日本語教育は、実用的教育、社会的教育ばかりでなく、それを伸ばすためにも、知的好奇心を大いに刺激するような創造的教育の可能性を検討していくべき時にあるのではないだろうか。クリエイティブ・ライティングと日本語教育を融合させた教授法研究の需要は増している」(p.9)と述べている。本学部には在籍する留学生は一部を除き大学入学前に1年半から2年の間、日本語学校などの日本語教育機関で日本語を学んでから入学してきているというのが一般的である。日本語学校の在籍期間は最長2年間であり、大学または専門学校などへの進学のための予備教育機関であるという性格上、そこで行われる内容はどうしても受験のための日本

語教育が中心とならざるを得ない。そのため新井が指摘するように実用性に偏る傾向があり、今回取り上げた詩などといったものは教材として用いられにくく、それらに触れたことが無いという留学生は多い。一方2018年の国際交流基金の調査では、世界の日本語教育機関に在籍する日本語学習者の日本語を学習する目的・理由として最も多かったのは「アニメ・マンガ・J-POP・ファッション等への興味」であった。つまり海外で日本語を学ぶ日本語学習者の日本語学習動機のトップは日本のサブカルチャーに起因しているというのである。言語を学習する動機付けとして、より良い仕事や待遇を得るために学習する「道具的動機付け」と、目標言語話者の文化や言葉を理解し、その文化に親しむために学習する「統合的動機付け」があると言われている。どちらが結果的に到達度が高いかという議論はまだ続いているが、筆者は日本語学校で試験勉強をみっちりとしてきた学生に、大学では日本語で読むこと・書くことの楽しさを味わい、「読みたい」「書きたい」という知的好奇心を高めながら日本語を学んでもらいたいと考えている。そのため短編小説やマンガ・アニメのほか、詩や俳句の創作なども積極的に授業に取り入れている。

## 2. 2. 詩を用いた授業実践

今回教材に選んだ谷川俊太郎の「生きる」は小学校の教科書にも採用されており、日本では最もポピュラーな詩の一つである。この詩を選んだ理由は、語彙や文法のレベルが学生に合っていることもあるが、何よりコロナ禍において「生きる」ことが当たり前でないという空気が広がり始めた時期であり、毎日の「生きているということ」について改めて考えてもらいたかったからである。

授業でこの詩を紹介すると、ほとんどの学生は日本語の詩を読むのが初めてだということ、更には中国出身の学生以外は縦書きの日本語を読むのもほぼ初めてだということが分かった。そこでまず日本語の新聞や小説などは基本的に縦書きであること、詩についても縦書きが主流であることを説明してから内容に入った。内容と言っても、小学生の国語の授業のように皆で内容を深く読み込むということはおえてせず、「木もれ陽」「ヨハン・シュトラウス」といった留学生には難解と思われる語彙の説明と、繰り返しや韻などの詩の技法についての簡単な説明に留めた。それは留学生はもう大人であるため、芸術作品である詩については皆それぞれの読み方をして

ほしいと思ったからである。結果的には、学生たちの母文化にはそれぞれ詩というものがあるため、多くを教師が語らなくても理解するにはそれで充分であったようだ。授業では、「私の国にはこのような詩がたくさんあります、先生！」と言って、いつもより積極的に授業に参加する学生が多く見られた。

小池(2002)は遠隔授業の問題点として、「空間の共有ができないため(中略)教員は一方的な情報伝達者と化し、受講者は興味を高めることができずに受け身の受講となるのである」と述べている。この日本語の授業でも、特に遠隔授業になってからは「読む」というインプットだけの作業では受け身になる可能性があるため、なるべくアウトプットを増やすことを心掛けていた。そのため、この「生きる」についても、詩を鑑賞するだけに留まらず、自分たちの「生きること」「生きていること」をそれぞれ詩にするという課題を出すことにした。作成のヒントとして、インターネット上に公開されていた小学生の「生きる」の詩を2つ紹介した。また原作の「生きる」では繰り返しや韻などの技法を用いていたが、これを参考にするかどうかは自由とした。縦書きで書くということにも挑戦させたかったので、課題はWordを使って縦書きで作成することとし、Wordでの縦書きの経験がない学生のために、ZOOMの機能で画面共有をしながら実際に設定を変更する方法を実践して見せた。できた詩はGoogle Classroomを通じて提出させた。

### 3. 作品について

筆者が担当した当該クラスは前章で述べた通り、プレイメントテストの結果が下位の2クラスで日本語の

レベルはN2前後、どちらのクラスも性格的にはどちらかという「元気な」学生が多いクラスであった。しかしながら提出されたものには、国の家族を思う詩、留学生の生活の大変さを詠った詩、恋心を詠った詩など、留学生の色彩豊かな心情が溢れた繊細なものが多くあり、日本語力や成績、授業態度では測れない芸術の力を思い知らされた。学生達の教室内とは違う一面が見られたことは教員としても大きな収穫であった。まずは提出された26編の中でも6章で述べる調査で人気が高かった3つの作品を紹介したい。

1つ目は1年生の中国人留学生Aの詩である(図1)。

この詩を書いた学生Aは授業中の私語や遅刻、欠席も多く、いわゆる「優等生」とは言えない学生であった。そういった事もあって彼からこの詩が提出されてきたとき、筆者は少し意表を突かれた。日頃どちらかといえば「無気力」にさえ見えていたAとラグビーや青春の雰囲気が頭の中で結びつかなかったし、いつも「ぶっきらぼう」に見えていたAとこの詩の繊細さが結びつかなかったからである。筆者はAとはこの日本語の授業でしか接する機会が無く、Aについてあまり知識が無かった。この詩が提出されて改めてAと個人的に話してみたところ、Aは高校時代から日本に留学しており、そこではラグビー一色の生活を送っていたそうである。しかし大学に進学し本キャンパスにはラグビー部が無かったためラグビーをやめてしまい、毎日がつまらないのだと語った。それが「無気力」に見えていた原因であるようだった。

2つ目は2年生のスリランカ人留学生Bの詩である(図2)。

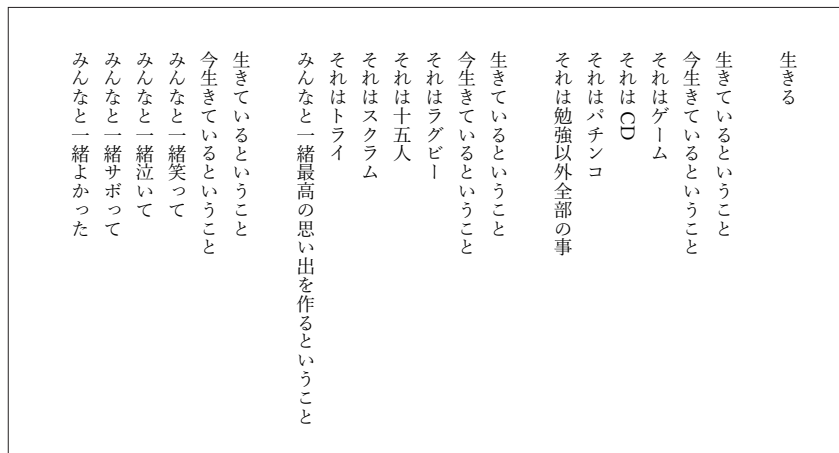


図1 中国人留学生Aの「生きる」



生きる

生きているという事  
 今生きているという事  
 それは朝日差しぬくもりを感じる事  
 母が作った朝のコーヒーを味わう事  
 鳥のさえずりを聞く事  
 生きるため今日もがんばってほしいと思ふ事

生きているという事  
 今生きているという事  
 赤色が緑になるまで待っている事  
 速く動く秒針を見る事  
 ペダルを早く回す事  
 笑顔で  
 どんどん前に進める事

生きているという事  
 今生きているという事  
 それはライトブルーのポロシャツ  
 それは食べれないあんなけスバゲッティ  
 それはインスタ返信メッセージ  
 美しい君と毎日出会える世界で生きている連があること  
 でも  
 愛を伝えられないこと

生きているという事  
 今生きているという事  
 世界の色が見える事  
 誰かを助ける事ができる事  
 何回も失敗する事  
 笑いながらも一回立ち上がる事

生きているという事  
 今生きているという事  
 いま人生一から始めようかと思ふ事  
 いま見知らぬ人から感謝をもらう事  
 いま人生はこんなもんだらうと案に思ふ事  
 いま限界と感ずてもやるしかないと思ふ事

図2 スリランカ人留学生Bの「生きる」

Bは詩に限らず、とても論理的で良い文章を書く学生なのであるが、それでもこの詩は遥かに筆者の想像を超えた作品であった。Bは趣味としてサイクリングをしていて、時には他県まで自転車でツーリングに行くというスポーツマンである。また日本人の友人も多いらしく、よく一緒に出かけているのをSNSで見かけていた。そんなBの日常の景色や思いが色鮮やかに伝わる詩であり、筆者の彼に対する印象もより奥深いものとなった。また、彼は日本語の会話はかなり上手なのだが、漢字がほとんど読めないし書けない。本人も「漢字は必要ない」と嘯いている。日本で大学生として生活する上で漢字が必要ないかどうかの議論はさておき、日頃比較的漢字教育に力を入れている筆者としては、ワープロソフトを使えばこのように素晴らしい文章を書けることに日本語教員として改めて考えさせられた。

また補足すると、文は全て提出された原文のままである。第2連の最後は「どんどん前に進めること」でな

く「どんどん前に進むこと」ではないかなと思ったが、芸術作品である詩に手を加えることはしたくなかったので、あえて指摘はしなかった。3連目最後の「でも、愛を伝えられないこと」の「でも」の後での改行は、彼自身によるものである。

3つ目は1年生のベトナム人留学生Cの詩である(図3)。彼女は口数が少なく、また1年生でほとんどZOOMの画面上の小さいマスを通してしか顔を見たことが無かったため、おとなしく真面目な女の子だという印象しかなかった。しかしながら提出された詩を読み、ガラリと印象を塗り替えられた。

詩の前半は普遍的な「生きること」を書いているが、後半になるにつれて次第に彼女自身に焦点が移り、彼女の「生きているということ」について素直に等身大で描かれていて微笑ましい。何より国による違いなんて無いんだな、と実感する詩でもあった。

提出された詩の多くは「泣ける」内容のものが多かつ

生きる

生きていると言うこと  
 今生きていると言うこと  
 食事をすると言うこと  
 飲むと言うこと  
 空が見えると言うこと  
 労働すると言うこと  
 笑うと言うこと  
 泣くと言うこと  
 怒ると言うこと  
 体が動けると言うこと  
 自由ということ

生きていると言うこと  
 今生きていると言うこと  
 それはファッション  
 それは新しいヘアスタイル  
 それは可愛い靴  
 全ての美しいものに会おうと言うこと

生きていると言うこと  
 かっこいい男の子に会おうと言うこと  
 かっこいい男の子と付き合おうと言うこと  
 毎日かっこいい男の子が見えると言うこと  
 何も考えず、たくさんお金を使うと言うこと  
 友達とショッピングをすること

図3 ベトナム人留学生Cの「生きる」

たが、中にはこのCのように微笑ましいもの、また「なんかまちがって店長怒ってること」などつい笑ってしまうものなどがあり、同僚の教員と泣いたり笑ったりしながら読ませてもらった。

#### 4. 詩の発信について

上で紹介した詩の他にも繊細さと力強さとユーモアを持った作品が多数提出された。毎週授業で接している筆者でさえこのように心が揺さぶられ留学生に対する認識を塗り替えられたのだ。授業の一環として行った活動ではあったが、教員だけが読んで終わりにするのは惜しいと考えた。花見(2000:61)は、「ある個人と個人の親密化の進展に関しては、二人の頻繁な時間の共有を土台として、互いの自己開示の度合いが大切な要素である」と述べている。つまり人と人が仲良くなるには、お互いをよく知る必要があるということである。この詩を読み留学生の事を知ってもらうことで日本人学生と留学生の距離が縮まるのではないかと考え、以下のような方法で発信を行った。

##### 4. 1. キャンパス内の展示

約2カ月の遠隔授業が終わり6月末から対面授業が部分的に再開されたこともあり、まずはキャンパス内のエレベーターホールに展示することを思いついた。学生にこの案を提案すると、「エー!」「恥ずかしい!」という声が上がったため、嫌な人は展示しなくてもいいこと、作者の名前を消してもいいことにした。しかし、結局ほとんどの学生は名前を消さずに展示することを選んだ。4色の色紙を用意し、各自好きな色を選んでもらって印刷しラミネート加工した。これら26編の詩を東海キャンパス4階の南側エレベーターホールに、図4のように色とりどりに展示した。

##### 4. 2. ビデオ作成とYouTube上での公開

約2カ月の遠隔授業を経てようやく部分的に再開された対面授業であったが、コロナの感染がまた拡大してきたため、1か月も経たないうちにまた遠隔授業が再開されることになった。展示物をあまり見てもらえないうちにまた遠隔になってしまう。そこでキャンパスに来なくても見てもらえる方法を考えた。翌週からまた遠隔になるという対面授業の最終日、全員に自分の詩の一番気に入っている部分を選んで覚えてもらい、一人ずつビデオを撮ることにした。撮影は筆者のスマートフォンで行った。覚える箇所は各自に任せたので、1連全てを覚えた者、1行だけ覚えた者など様々であった。なかなか覚えられず10回以上撮りなおす学生も少なくなかった。そうしてなんとか撮り終えた動画ファイルを内容別に分けて再編成して、スマートフォンの無料動画編集アプリを使用して1本の動画ファイルに編集した。親しみを持たせるため、最後に「メイキング&NGシーン」も入れた。これをインターネット上の動画共有サービスYouTubeにアップロードし公開した<sup>4</sup>。アップロードは本学の留学生を紹介する「にっぽく留学生」チャンネルから行った。またこの動画は後に愛知県国際交流協会などが主催する「ワールド・コラボ・フェスタ2020」<sup>5</sup>にも展示された。

##### 4. 3. インスタグラムによる発信

筆者らは大学生の使用率が高いSNSの一つであるインスタグラムに、日本で頑張る留学生達を紹介する「ryugakusei\_project」というアカウントを所有している。このアカウントから本人の了承を得た上で、本人から提供された写真を含む数枚の顔写真とともに6編の詩と4. 2. で述べたビデオを投稿した。



図4 エレベーターホール展示の様子

## 5. 調査

詩を発信したことにはどのような効果があったのだろうか。詩を書いた留学生と、詩を読んだ人々にそれぞれ以下のアンケートを行った。

### 5. 1. 【調査1】詩を書いた留学生への調査

一連の発信を行うにあたって、学生から反対意見は出なかったものの、教員である筆者の提案であったため、留学生たちはノーと言えなかった可能性があった。留学生達は詩の創作やキャンパス内展示、ビデオ撮影と動画公開についてどう感じていたのだろうか。今後の活動の参考のためにも、詩を書いた留学生を対象に、下記の調査を行った。<sup>6</sup>

#### 5. 1. 1. 調査内容

Google Forms を用いて以下の項目についてアンケート調査を実施した。

##### 【キャンパス内の展示について】

- (1) 展示はうれしかったか（「とてもうれしい」から「全然うれしくない」の5段階評価）
- (2) 展示は恥ずかしかったか（「とてもはずかしい」から「全然はずかしくない」の5段階評価）
- (3) 展示について感じたこと（自由記述）

##### 【ビデオ作成とYouTube上での公開について】

- (4) ビデオの作成と公開はうれしかったか（「とてもうれしい」から「全然うれしくない」の5段階評価）
- (5) ビデオの作成と公開は恥ずかしかったか（「とてもはずかしい」から「全然はずかしくない」の5段階評価）
- (6) ビデオの作成と公開について感じたこと（自由記述）

- (7) 機会があればまた同じようなことをやりたいか（「はい、もちろん」から「いいえ、ぜったいやりたくないです」の5段階評価）

### 5. 1. 2. 調査結果と考察

詩を書いた留学生 26 名のうち 14 名が調査に回答してくれた。

#### 5. 1. 2. 1. キャンパス内の展示について

エレベーターホールに詩を展示したことについて、嬉しかったか、また恥ずかしかったかについて5段階評価で尋ねた。調査は全て日本語で行ったため、「少し嬉しかった」などの表現が誤解を生む可能性を考えてあえて文言を書かず、Google Forms の「均等目盛」の機能を使い4から0の数字のスケールだけにした。その結果を表1に示す。

表1 キャンパス内の展示に対する留学生の気持ち

	(人)				
	4	3	2	1	0
4: とてもうれしい～0: 全然うれしくない	11	3	0	0	0
4: とてもはずかしい～0: 全然はずかしくない	5	4	1	0	4

キャンパス内に自分の詩が展示されたことは、3割ほどが恥ずかしいと思いながらも、少なくともアンケートに協力してくれた14名に関しては、嬉しいと感じていたことが明らかになった。自由記述欄には「去年に生きてを書く詩についてすごく楽しかったです。初めて詩をやったので分からない事が結構あったけど自分の感想で書けば自然な詩ができるだと思う。」「日本語で詩を書くのは初めてでしたが楽しかった。自由に自分の日常生活について書くのでご家族のことも思い出された。」「すごくいいと思います。留学生が書いた詩を他の人を見て貰

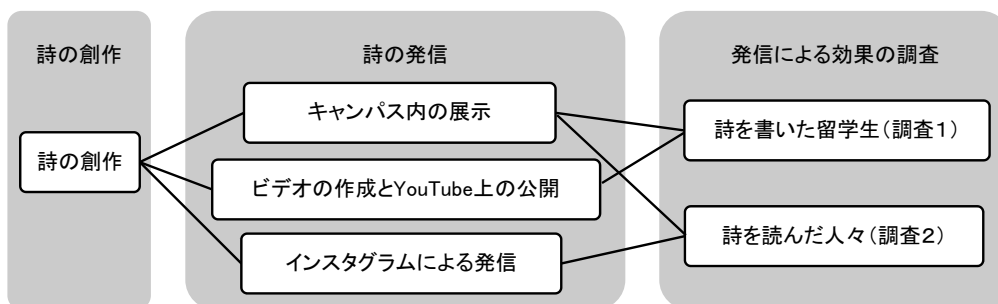


図5 詩の創作から発信、調査までの流れ

うのがとてもいいことだと思います。」「自分の書いたことを皆を伝えられるのが嬉しい。」「先生、私たちの詩を投稿していただきありがとうございます。」(全て原文ママ)といった記述が見られ、詩を展示したことだけでなく詩を創作したについても肯定的に捉えられているようでまずは教員として胸を撫で下ろした。

留学生は日本社会においても学部内においても数的にマイノリティであり、言語的な面でも「支援される側」になることが多い。そのためキャンパス内でもなかなか日本人学生と対等な立場に立ちづらいと言える。しかしこの詩の創作活動と展示は留学生にとって何らかの自信に繋がったようである。現在ではキャンパスで対面授業が再開されているが、学生たちがよくこの展示の前で写真を撮っているのを見かける。留学生の詩の内容が素晴らしいからなのか、ただ単に色紙が貼ってあってカラフルだからなのか、理由を聞いてみたことはないが、日本語教員として留学生を担当する筆者は見かけるたびに誇らしい気分になる。詩の作者である留学生たちは尚更であろう。

#### 5. 1. 2. 2. ビデオのYouTube上での公開について

次に「生きる」のビデオを作成してYouTubeに公開したことについて、嬉しかったか、また恥ずかしかったかについて、同様にGoogle Formsの「均等目盛」の機能を使い、5段階で選択してもらった。その結果を表2に示す。

表2 動画を作成し公開したことに対する留学生の気持ち

	(人)				
	4	3	2	1	0
4: とてもうれしい～0: 全然うれしくない	13	1	0	0	0
4: とてもはずかしい～0: 全然はずかしい	8	1	1	1	3

動画に関しては、やはり顔や声が出るからなのか、恥ずかしいと感じた学生が多かったようだ。しかしながら、嬉しいという答えた学生もまた多く、「嬉し恥ずかし」と言ったところだろうか。自由記述欄には「ちょっと恥ずかしかったけれど後はすごく嬉しかったです。」「みんなの笑顔を見て嬉しく感じました。」「皆と一緒にビデオして、とても楽しかった。」といった記述が見られた。あまり考える期間を与えず動画の撮影をしてしまいそのまま遠隔授業に突入してしまったため、全員の承諾を得てはいたものの本当は嫌だったのではないかと

いう一抹の不安があったのだが、この結果で払拭された。前述したようにこの動画はこの後、愛知県国際交流協会などが主催する「ワールド・コラボ・フェスタ2020」にも展示された。

また同様の企画をやりたいか、という質問をしたところ、表3のような結果となった。

表3 「また同じようなことをやりたいか」に対する回答

	(人)				
	4	3	2	1	0
4: はい、もちろん～0: いいえ、絶対やりたくない	9	4	1	0	0

韓国の学習者を対象に物語の創作を実践し報告した小松(2017:196)は、

学習者に「表現することの喜びを知る」機会を与え、「自ら表現しようとする意欲を育て」ることができるとすれば、書くことそのものを楽しむという観点から日本語教育の「書く」活動に創作活動を持ち込むことは意義あることと思われる。

と述べている。確かに今回の詩の創作活動は通常の授業で行う作文などよりも皆積極的で、楽しんで書いているようであった。漢字や語彙、文法など書くための技術の習得も確かに必要ではあるが、「書くことを楽しむ」ことは学習動機という側面からも非常に重要である。今回題材に選んだ詩と言うジャンルはそれほど日本語の文法や語彙の知識がなくとも気軽に楽しむことができた。この結果を受け、キャンパス内の多文化共生のみならず日本語教育の観点からもこのような創作活動はこれからも続けていきたいと改めて思った。

#### 5. 2. 【調査2】詩を読んだ人への調査

夏季休暇が終わって後期になり対面授業が再開されたため、エレベーターホールの展示を再び読んでもらえるようになると、学生や教職員から「とても良かった」「感動した」などの感想をいただくようになった。そこで、詩を発信したことによってどのような効果があったかを調査するため、アンケート調査を実施した。

##### 5. 2. 1. 調査内容

エレベーターホールの展示やインスタグラムで詩を読



んだ人を対象に、Google Forms を用いて、以下の項目について調査を行った。

【全員回答】

- (1) 詩を読んで思ったこと、感じたこと (自由記述)  
 (2) 好きな詩3つと、選んだ理由 (自由記述)

また、回答者を限定し、以下の質問に答えてもらった。

【留学生以外回答】

- (3) 詩を読んで留学生に対する考えは変わったか  
 (変わった／変わらない／どちらともいえない)  
 (4) どのように変わったか (自由記述)

【日本人学生のみ回答】

- (5) 留学生とどの程度の付き合いがあるか (授業中も休暇中もプライベートな付き合いがある／授業がある日だけプライベートな付き合いがある／授業中だけ一緒に作業する／ほとんど関わらない)  
 (6) 留学生ともっと仲良くしてみたいと思うか (とても仲良くなりたい／ある程度仲良くなりしたい／あまり仲良くなりたくない／全然仲良くなりたくない)  
 (7) どうしてそう思うか (自由記述)

【留学生のみ回答】

- (8) 日本人学生とどの程度付き合いがあるか (授業中も休暇中もプライベートな付き合いがある／授業がある日だけプライベートな付き合

いがある／授業中だけ一緒に作業する／ほとんど関わらない)

- (9) 日本人学生ともっと仲良くなりたと思うか (とても仲良くなりた／ある程度仲良くなりた／あまり仲良くなりたくない／全然仲良くなりたくない)  
 (10) どうしてそう思うか (自由記述)

5. 2. 2. 調査結果と考察

調査の結果、95名から回答を得た。回答者の内訳は「日本人学生、あるいは家族滞在など「留学生」ではない在留資格を持っている学生」(以下「日本人学生」) 65名、留学生23名、教員2名、職員1名、大学部外者4名であった。この結果から、留学生の詩を発信したことがキャンパス内の多文化共生の促進にどのように効果があったかを中心に検討する。

5. 2. 2. 1. 留学生の詩を読んで思ったこと、感じたこと  
 まず「留学生の詩を読んで思ったこと、感じたこと」に対する回答は自由記述の形式であったが、60件の回答があった(日本人学生44件、留学生12件、職員1件、教員2件、大学部外者1件)。表4はそれらを回答者の属性ごとに分類したものである。また日本人学生の回答44件については内容ごとに更に分類した。

ここでは本学のキャンパス内の多文化共生促進の観点から、日本人学生の回答を中心に検討する。日本人学生

表4 留学生の「生きる」を読んで感じたこと、思ったこと (全員回答)

回答者	回答例		件数
日本人学生	内容	・感動した ・生きる大切さを知った ・人それぞれの価値観や違いによって詩の内容が変わっていることに面白いと感じた ・みんな凄くいい文章を書いていて、とても楽しく読むことができ、暖かい気持ちになりました など	36
	日本語・表記	・誰も上手に書いていてすごいと思いました。 ・日本語がとても上手で、とてもおもしろい詩を書くなと思った など	4
	留学生に対する考え方や対応の変容	・人種や出身国は違えど、自分と同じような境遇や考え方は同じなんだと再認識させられた ・海外で生きることを大変さや、その反対に楽しさも分かった。これから留学生や外国人の方と関わるときには日本人の印象が悪くならないように優しい日本語や丁寧な日本語を使って会話したいと思った。 ・日本に来ることでもいろんな不安を抱えていることがわかって、もっと多くのことを話そうと思いました。 ・価値観の違いなんてなくて一緒に悩んでいることがあれば相談に乗ったり仲良くしていきたいと思った。	4
留学生	・私の考えと大体同じです ・内容も面白いし、自分の生活もだいたいそんな感じですから ・本当に感動しました など		12
教員	・表現が難しい日本語でも良く書けていて、刺激がある内容でした ・のびのびとした表現力もすごい		2
職員	地球上で生きている方々すべて違いますが、留学生の方々がこの日本で生きることは、本当に大変かと思っています。その大変な状況下でも、笑顔いっぱいの顔を拝見でき、心を癒されております。その反面、努力や苦勞をされていることも知り、感動もしています。		1
その他	日本人と同じ価値観を持っていると感じた		1

の回答を見ると、全体として「感動した」「生きる大切さを知った」など内容についてコメントが多かった。その他「考え方は同じなんだと再認識させられた」「価値観の違いなんてなくて」など留学生に対する考え方の変容や、「優しい日本語や丁寧な日本語を使って会話したいと思った」「もっと多くの事を話そうと思いました」など今後の留学生に対する対応を変えていこうとする回答も見られた。

#### 5. 2. 2. 2. 好きな詩3つと選んだ理由

展示した26編の詩の中から好きなものを3つ選んでもらい、その理由を書いてももらった。ほとんどの詩に票が入ったが、中でも3章で紹介した3編の詩は特に人気が高かった。ここではそれらの詩を選んだ理由について紹介する(表5)。

全ての詩について、内容に関するものが多かったが、その中に、「共感」という言葉や、「自分と同じ、似ている」といったコメントが多く見られ、それまで少し遠くに感じていた留学生が思ったより自分と同じ考えや価値

観を持っていると感じたことが窺える。留学生の詩を発信することにより日本人学生が留学生の考えや環境を知り関心と共感を得たことは、留学生と日本人学生の間にある距離を縮め、キャンパス内の多文化共生実現の第一歩であったと言える。

#### 5. 2. 2. 3. 詩を読んで、留学生に対する考えは変わったか

留学生以外の72名を対象に、詩を読んだことによって留学生に対する考えが「変わった」「特に変わっていない」「どちらとも言えない」のうち、どれかを選択してもらった。すると31名が「変わった」(うち日本人学生27名)、16名が「特に変わっていない」(全て日本人学生)、25名が「どちらとも言えない」(うち日本人学生22名)と答えた。

更に「変わった」と答えた31名に対し、どのように変わったかを自由記述で書いてもらった(表6)。

ここでもやはり「自分と似ている」「日本人と同じだ」など共感を示唆するもの、「もっと留学生の人を良く見て話そうと思った」などこれからもっと仲良くしたいと

表5 好きな詩とその理由(全員回答)

好きな詩	好きな理由
中国人留学生Aの「生きる」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読んでいて心に響いた。</li> <li>・生きていることをラグビーに例えていたのが面白いと感じた。</li> <li>・一緒と言う言葉が使われていていいなと思った。</li> <li>・自分の生き方を見直すきっかけになった。 など</li> </ul>
スリランカ人留学生Bの「生きる」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今の自分が生きる目的が似ていると思った。自分にも共通できる部分があった。</li> <li>・自分の伝えたいことが明確であり、共感できる部分が多かった。</li> <li>・私が想像する生きるとは異なっていて面白い部分が沢山あった。</li> <li>・楽しく生きていることがわかるから。</li> <li>・いろんな人に対する愛が伝わった。 など</li> </ul>
ベトナム人留学生Cの「生きる」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共感できたから。</li> <li>・自分らしい日常が表されていてよかった。</li> <li>・人種や出身国は違えど、自分と同じような境遇や考え方は同じなんだと再認識した。 など</li> </ul>

表6 留学生の詩を読んで、留学生に対する考えがどのように変わったか(留学生以外回答)

内容	回答例	回答数
共感	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分と似ている</li> <li>・日本人と同じだと感じた</li> <li>・留学生は特別な存在でなく、1人の人間 など</li> </ul>	6
留学生はすごい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生はすごいいいことを考えているので日本人とは違う</li> <li>・自分たちの会話よりも難しい言葉を使っている詩もあったので見ていてすごいと思いました。</li> </ul>	2
もっと仲良くしたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと外国人に優しくしなければならないと思った</li> <li>・これからもどんどん留学生と仲良くしたいと思った</li> <li>・もっと留学生の人を良く見て話そうと思った など</li> </ul>	6
留学生に対する印象の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までは留学生は考えていることがよく分かりませんでした。物事を広く考えているということを知り、真面目な印象に変わりました。</li> <li>・留学生は結構楽観的なイメージだったのですが、苦勞してきたのちにいまがあるのだと知りました</li> <li>・明るくて、関わりやすい</li> </ul>	3
一緒に学ぶことの大切さ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・彼らと同じ大学で一緒に過ごすことの大切さを改めて考えさせられた。</li> </ul>	1

いう内容のコメントが多く有った。また「今までは留学生は考えていることがよく分かりませんでした。物事を広く考えているということを知り、真面目な印象に変わりました」など留学生に対する印象に変化が見られる意見もあった。留学生と日本人学生の交流について考察した青木（2010:43）は

留学生・日本人学生の「交流」には、意図的な介入が不可欠であることを指摘しておきたい。これは交流の時間がなかなか持てないとの物理的要因も然ることながら、特に日本人学生が持つ「留学生」に対するイメージにも起因している。（中略）相手を知ることは、相手との距離を縮めることに繋がる。意図的な介入は相手を知る機会を提供するために重要である

と述べている。今回の一連の取り組みは留学生側からの一方通行の発信ではあったが、この結果を見ると詩を発信するといった「介入」で詩を読んだことにより日本人学生の約半数が留学生に対する印象・イメージに何らかの変化があったことが窺えた。また、考えが「特に変わっていない」と答えた16名について、次項に述べる「現在の留学生との付き合いの程度」を見てみると、9名は既にプライベートな付き合いがあると答えていた。残りの7名は現在プライベートな付き合いが無いと答えたが、今後留学生と「とても仲良くなりたい」（4名）、「ある程度仲良くなりたい」（3名）と答えていた。このことから、考えが特に変わっていないと答えた学生は、留学生に対する考えがもともとポジティブなものであったと推察できる。

#### 5. 2. 2. 4. 日本人学生と留学生との付き合いの程度について

次に日本人学生のみを対象に、今現在留学生とどの程度の付き合いがあるかについて「授業中も休暇中もプライベートな付き合いがある」「授業がある日だけプライベートな付き合いがある」「授業中だけ一緒に作業するがプライベートな付き合いはない」「ほとんど関わりがない」の4つから選択してもらった。また、今後留学生と もっと仲良くなりたいかについて、「とても仲良くなりたい」「ある程度仲良くなりたい」「あまり仲良くなりたいと思わない」「全然仲良くなりたいと思わない」の4つから選択してもらった。この2つの回答を図6に示す。

これまで行ってきた本学部の取り組みの成果もあり、留学生と何らかのプライベートな付き合いがある層が72%と大半であるという結果になった。しかしながら、授業が無い日にも付き合いがあるという学生は約25%と依然として限定的であることもまた明らかになった。留学生は休暇中はアルバイトに忙しくあまり遊んでいる時間などないという理由もあるだろうが、大学生の休暇は長く、夏休みや春休みなどの長期休暇に入れば1か月2か月とキャンパスに来ない学生も多い。休暇中に日本語を忘れてしまったという声を留学生からよく聞くが、これは休み中に日本人との接触が少ないという証拠でもある。現在はコロナ禍で思うような企画もできないが、今後コロナが収束した時には授業の無い長期休暇中はゼミ単位で活動するなどの仕掛けづくりも必要かもしれない。

またプライベートな付き合いが無いと答えた学生も25%程いたが、その全てが今後については「とても／ある程度仲良くなりたい」と答えており、仲良くなりたいと考えているけれども実行に移せていない学生が一定

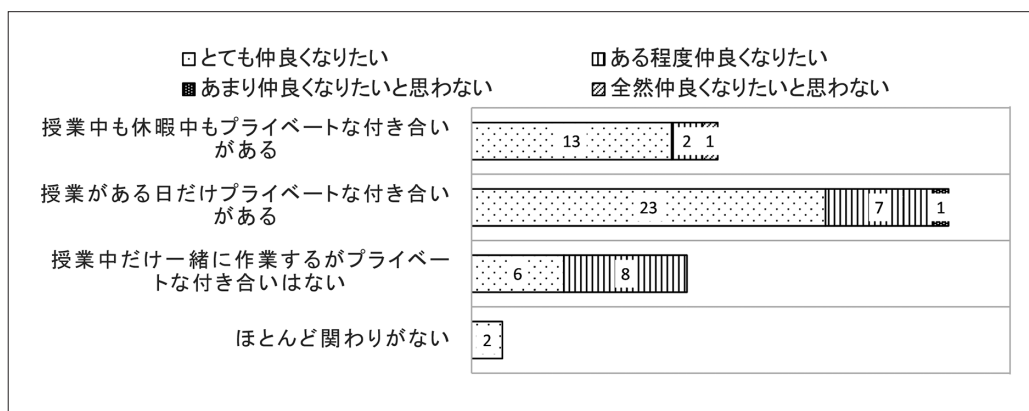


図6 留学生とどの程度の付き合いがあるか 今後仲良くなりたいと思うか（日本人学生のみ回答）

数いるということもまた明らかになった。

また今後の付き合いについて、仲良くなりたい／なりたくないと思う理由についても記述してもらった。その結果を表7に示す。

表7の示す通り、「日本だけではなくて、いろんな国の人たちのことを知りたいと思っているから」「国際交流が好きで外国のことを知りたいと思うから」といったような、海外や他文化への興味関心が大半を占めたが、

表7 仲良くなりたい度合いとそう思う理由（日本人学生回答）

仲良くなりたいと思うか	そう思う理由
とても仲良くなりたい	日本だけではなくて、いろんな国の人たちのことを知りたいと思っているから
	面白そうだから
	いろんな世界が知れると思ったから
	国際交流が好きで外国のことを知りたいと思うから
	意見を交換したいから
	国際関係を広げたいのももちろんあるが、友達に少しでも安心してほしいから
	異文化交流したいから
	色々な言葉を知りたいから
	言葉が話せるようになりたい。英語を教えて欲しい。海外についてもっと知りたい
	様々な言語に触れたい！
	いっぱい海外のことを聞きたいし普通に友達になりたい！！
	英語力が伸びると思うから
	新しい価値観を身につけられそうだから
	多国籍の友達がいらないから
	異文化理解
	今も仲が良いがいるので今以上に親交を深めたいから
	留学生と交流することで様々な国の文化や価値観を知ることができるからです
	仲良くなって色々な話を聞いてみたい
	他文化を学びたいから
	いろんな国の文化を知りたいから
	我々日本人とは全く違う世界観や価値観、文化背景をいろいろ知りたいから
	彼らの考え方や文化を知ることができるから
	留学生と交流することで自分の知らない世界を知ることができるから
	国際交流を広めたいから
	たくさん国のことを学びたいから。知りたいから
	自分の英語力向上にも繋がるし仲良くなりたい
	1度プライベートで遊んだことがあり、面白い人と感じたため
	仲良くしたいと思わない理由がわからない
	コミュニケーションをとることは楽しいから
	もっと仲良くなって国のこととか教えてもらいたいです
	友達が欲しいから
	留学生と関わり海外の文化を学びたいからです
	いろいろな国の文化を知りたいから
現在あまり留学生との関わりが無いから	
他国の文化を知ることができるし、将来何かのいいきっかけになるかもしれないから	
留学生と関わることによって新たな発見があったり、考え方も変わるのもっと関わりたいです	
また、留学生はいい友達ばかりなのでこれからも関係性を大切にしたいです	
仲良くなって、お互いの国のことはもちろん、1人の人間同士として仲良くしたい	
せっかく出会えたから	
言葉の壁等で声かけしても困られたら自分も困るので	
今まで仲良くしてもらって楽しかったからこの先も仲良くなりたいです	
英語力が高められそうだから	
仲良くなりたいから	
国境を越えた意見や考えを知りたい	
色々な国の文化を知れるから関わっていきたいと思う	
ある程度仲良くなりたいです	
異国の文化も気になるし良ければ参加したいから仲良くなりたいです	
交流を通して、英語をもっと知りたい	
自分の視野を広げることができるから	
外国人の友達を作りたいから	
いろんな文化を知りたいから	
知りたいから	
他の国の文化や美味しい食べ物を教えてもらいたいです	
いろいろな考えに触れることはいいことだから	
今まであまり留学生と喋ってこなかったから	
もっと仲良くなりたいから	
仲良くなることによって、他の国の文化をより詳しく知ることができるから	
あまり仲良くなりたいと思わない	外国人は怖いイメージ



そのほかにも「普通に友達になりたい!!!」「1度プライベートで遊んだことがあり、面白い人と感じたため」など、留学生だということは関係なく仲良くなりたというものもあった。また「英語を教えてほしい」など英語の上達に関する回答が5件有った。本学部では毎年8月にアジア各国の高校生・大学生を招いて「ワールド・ユース・ミーティング」という国際交流イベントを開催している。このイベントは企画段階から進行まで本学部1・2年生が主体となって行うが、相手校との連絡、プレゼンテーションなどは全て英語で行う。本学部の留学生の中に英語母語話者は居ないが、スリランカやフィリピン、ネパールからの留学生の中には英語が堪能

な学生も居り、このイベントでは大活躍する。日本人学生の中にはそのイメージが強く残っていると思われる。

また仲良くなりたくない理由については1件だけ記述があったが、「外国人は怖いイメージ」というものであった。曲がりなりにも学部名に「国際」と名が付き、異文化理解や国際協力について日々学んでいる本学部においてこのような意見があるということについて、留学生支援のためだけでなく日本人学生の学びのためにも学部内の多文化間交流・多文化間共修を更に進めていく必要があると実感した。

次に留学生の回答をしてみる(図7)。日本人学生とプライベートな付き合いがあると答えた学生は23名中

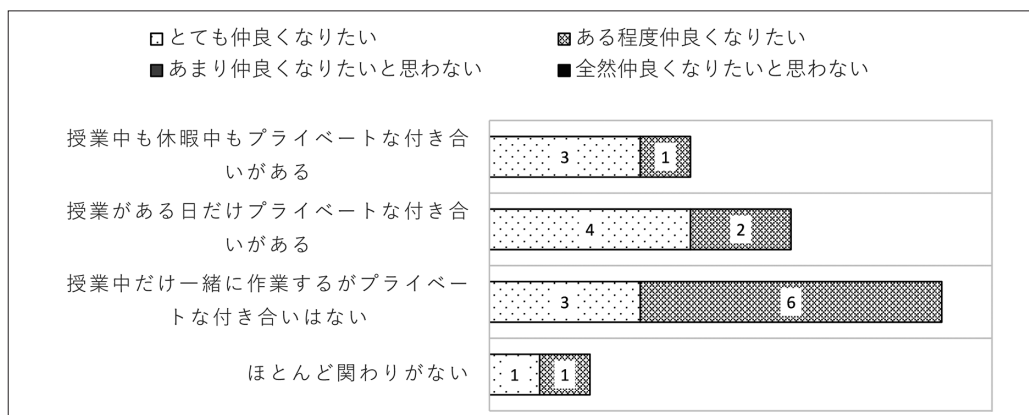


図7 日本人学生とどの程度付き合いがあるか 今後仲良くなりたいと思うか (留学生のみ回答)

表8 仲良くなりたい度合いとそう思う理由 (留学生回答)

仲良くなりたいと思うか	そう思う理由
とても仲良くなりたい	友達が増えるから
	世界の文化や習慣が調べたいからです
	友達ができるのはうれしいです 日本の言語や文化も習うことができます
	日本語を勉強できる
	会話を練習したいからです
	大学で楽しい勉強しいです
	日本人学生から色々なことを学びたいです、日本語以外文化、習慣も知りたいです
	日本語喋りたい、日本人の友達を作りたいから
	日本人の考え方や文化についてもっと知りたいですから そして、日本にいたので、日本人の友達がいたら、生活しやすいと思います
	文化と言語をよく学ぶために
ある程度仲良くなりたい	人間関係を良くなるために仲良くなりたいたから
	楽しい大学生活を送りたいからです
	日本語能力を高めたいと思う 勉強に必要です
	日本語上手になるし、日本の文化知ることができます
	日本に住んでいる、日本人の友達が必要だと思えます
	生活は楽しく、日本の文化や毎日なので生活を気になりました。
	少しでも会う時、挨拶して、このようなことが続いたら、だんだん仲良くなると思う 相手によって仲良くなりたいた
	もっと仲良くなりたい、日本人と一緒にたくさんやりたいから
	日本の文化をもっと理解し、人間関係を広げていきたいです
	日本語で会話できるし、分からないこと聞くことができるからです もっと日本語勉強したいので、もっと仲良くなりたいたです

10名と半数以下であった。図6の日本人学生の回答と合わせて考えると、留学生は日本人学生が思うほど付き合いがあると感じていないか、あるいは一部の社会的な留学生は複数の日本人学生とプライベートな交流があるが半数以上の留学生は依然として日本人学生と授業内ではしか関わりのない、あるいはほとんど関わりのないという状況が推測できる。

仲良くなりたいと思う理由の記述としては現在日本人学生と付き合いが有る無しにかかわらず、「友達ができるのはうれしいです」「楽しい大学生活を送りたいから」「日本語能力を高めたい」といった意見が挙げられていた。

また、アンケートの最後に自由コメント欄を設けたが、そこにも留学生から「早くみんなと仲が良くなりたい」という記述もあった。留学生からは「仲良くなりたいと思わない」という回答は1件も無かった。日本学生支援機構(2019)の「私費外国人留学生生活実態調査」によれば、留学生の日本に留学後の苦勞で克服できなかったこととして「学校内で日本人学生と交流できないこと」を挙げた留学生が19.2%もいたことが報告されている。本学部の留学生からも「日本人は冷たい」という声を聞くことは依然として多い。山口他(2020)は日本人学生と留学生の交流における認知のずれを指摘しているが、学部においてマジョリティである日本人学生が「既に留学生と付き合いがある」と感じて満足していたとしても、マイノリティである留学生の立場からしてみるとその付き合い方はまだ足りないのかもしれない。今回の留学生の詩の発信の理由として、人と人が仲良くなるための「自己開示」を挙げたが、今回留学生についての開示はできたが、日本人学生側の開示はできていない。今後どのようにお互いを開示しあい、このギャップをどう埋めて交流を促進していくのかが今後の課題である。

## 7. まとめと今後の課題

本稿ではコロナ禍で行った留学生の詩の創作活動と、それを発信したことによる効果について報告した。留学生は日本語の詩を読むことはおろか、縦書きの文章を読むこと・書くことも初めての体験であったが、母文化で既に持っている知識と能力を活かして、日本語で書くことを楽しみ、日本語のレベルや漢字の知識に関わらず繊細で色彩豊かな作品を作ることができた。

この詩をキャンパス内への展示、動画作成と公開、

SNSでの発信という形で発信した。アンケート調査の結果、詩を書いた留学生たちは、この活動について「恥ずかしい」という気持ちもありつつ「嬉しい」と感じており、普段はキャンパス内で「支援される側」になることが多い留学生が何らかの自信を持つことができたことが分かった。また詩を読んだ日本人学生からは留学生に対する共感や考えの変容を示す感想が寄せられ、それまでそれほど留学生と付き合いがなかった学生も「仲良くなりたい」という気持ちを持つようになったことが分かった。また仲良くなりたいと思っていながら、まだ付き合いを持っていない学生が一定数いることも明らかになった。しかしながらこの調査の結果から、同じキャンパスで留学生と席を並べているにも関わらず「外国人は怖い」といったイメージを持っている学生が存在することもまた明らかになり、更なる多文化交流、多文化間共修の必要性が浮き彫りとなった。また、現在の付き合いの程度に関して日本人学生と留学生の感じ方にギャップがあることも明らかになり、これをどう埋めていくかも今後の課題である。今回は留学生の日本語教育現場からの取り組みであったが留学生側からだけの一方的な発信の留まったが、「まだ仲良くなりたいのに付き合いが持っていない」という学生が目の前にいることが分かった。今、今後は更なる多文化間交流の「仕掛け」作りとキャンパス内の真の多文化共生に尽力したい。

## 参考文献

- 青木麻衣子(2010)「留学生と日本人学生の「交流」を考える：「ホリデーイン日高」2010活動報告」『北海道大学留学生センター紀要』14, 33-49.
- 新井高子(2012)「日本語教育に詩を取り入れるための教授法研究(2)」『国際交流センター紀要』6, 1-13, 埼玉大学国際交流センター
- 有田佳代子(2004)「留学生と日本人学生の相互交渉創出の試み」『敬和学園大学研究紀要』13, 129-147.
- 大西晶子(2016)『キャンパスの国際化と留学生の相談—多様性に対応した学生支援サービスの構築』, 東京大学出版会
- 小池浩子(2002)「遠隔授業の抱える課題と効果的授業方法—教員のコミュニケーション能力の役割—」『信州大学教育学部紀要』105, 85-96.
- 公立大学法人国際教養大学 Web サイト <https://web.aiu.ac.jp/campuslife/feature/> (2021年9月16日閲覧)
- 国立大学法人豊橋技術科学大学 Web サイト [https://www.tut.ac.jp/special/20min/movie/J\\_003.html](https://www.tut.ac.jp/special/20min/movie/J_003.html) (2021年9月16日閲覧)
- 小松麻美(2017)「日本語学習者と楽しむ物語の創作—田村式メソッドによる超ショートショートづくりをめぐる—」

- 『日語日文学研究』102(1), 192-214.
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子(編)(2017)『多文化間共修:多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』, 学文社
- 祖父江カースティ(2020)「留学生との接触による日本人学生の「多文化」に対する意識変化—国際福祉開発学部の取り組みからの一考察—」『現代と文化:日本福祉大学研究紀要』141, 35-51.
- 田井真聡(2020)「詩を教材とした日本語教育—インドネシア, ダルマ・プルサダ大学での実践を例にして—」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研究』1, 480-487.
- 坪井健(1999)「留学生と日本人学生の交流教育—オーストラリアとの比較を通して」『異文化間教育』13, 60-74, アカデミア出版会
- 中野はるみ(2006)「異文化教育における留学生の役割」『長崎国際大学論叢』6, 55-64.
- 日本学生支援機構(2019)「平成29年度私費外国人留学生生活実態調査概要」[https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2020/10/seikatsu2017.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/10/seikatsu2017.pdf) (2021年9月16日閲覧)
- (2020)「2020(令和2)年度外国人留学生在籍状況調査結果」[https://www.studyinjapan.go.jp/ja/\\_mt/2021/04/date2020z.pdf](https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf) (2021年9月28日閲覧)
- 花見楨子(2000)「日本人学生と留学生との交流:対等な関係の模索(その1)」『三重大学留学生センター紀要』2, 53-56.
- 文部科学省(2020)「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について※調査時点 令和2年5月12日(火)20時00分時点」[https://www.mext.go.jp/content/202000513-mxt\\_kouhou01-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/202000513-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf) (2021年9月16日閲覧)
- 山崎佳代子(2006)「初級日本語教育における「詩のワークショップ」:谷川俊太郎『ことばあそびうた』から」『日本語教育連絡会議論文集』19, 70-82.
- 山口雄介・小林里華(2020)「日本人学生と留学生の交流における認知のずれに関する研究」『日本経大論集』50, 121-136.
- 山田泉(2018)「国内の多文化体験学習活動の意義—多文化教育, 外国語教育, 市民性の育成」村田晶子(編)『大学における多文化体験学習への挑戦—国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』, 80-88, ナカニシヤ出版
- 横田雅弘(1991)「留学生と日本人学生の親密化」『異文化間教育』5, 81-97, アカデミア出版会
- 横山芳春(2021)『日本語を学ぶ中国の若者たち—詩の授業による心の交流の記録』, ボーダーインク
- 龍谷大学 Web サイト [https://intl.ryukoku.ac.jp/center\\_info/gaiyou.html](https://intl.ryukoku.ac.jp/center_info/gaiyou.html) (2021年9月16日閲覧)

## 注

- 1 本学部の学生数に占める現在の留学生数の割合は約25%である。
- 2 高校時代から日本に留学している学生も少数だが在籍している
- 3 女子学生2名が匿名を選んだ。展示を拒否した者はいな

かった。

- 4 <https://youtu.be/PXGL70vmYUw>
- 5 コロナウィルス感染防止のためオンライン開催であった。
- 6 インスタグラムについては全員の詩を載せたわけではなかったもので、あえて質問から外した。
- 7 当時の学部生における留学生の割合は19.3%であった。
- 8 2名が無回答であったが、そのうちの1名からはアンケート最後の自由記述欄にその理由として「別に留学生だから仲良くすると留学生だから仲良くしないと思わない。仲良くするかしないかに留学生かどうかなんて関係ないと思っている。」というコメントがあった